

空中都市008とは

「空中都市008」は、1969年の初版から40年以上にわたって出版され続けている、小松左京による、21世紀を舞台とした子供向けのSF小説です。

NHKの連続人形劇として映像化され、ノーベル化学賞を受賞した田中耕一さんの愛読書としても話題となりました。

* 1968年に「アオゾラ市のものがたり」として月刊PTAで連載開始。

* 「008」は、人形劇に合わせて新たに命名されたもの。

国際ダイヤル通話における日本の識別番号から(実際には0081となりました)

小松左京は、「空中都市008」のまえがきで、次のように述べています。



これは二十一世紀のお話です。
そのころの世界は、きっとすばらしいものになっているでしょう。
町はきれいになり、すばらしいビルがたち、町を歩いても自動車にひかれることなく、工場のけむりや、排気ガスで、空がよごれるようなこともなく、大きな町の空は、いつもあおあおとすみわたっているでしょう。

——「空中都市008」は、そんな時代の、
大きな都会の話です。



空中都市008
アオゾラ市のものがたり
(講談社 青い鳥文庫シリーズ)

「空中都市008」で描かれた科学技術

作品の中では様々なテクノロジーが紹介され夢のような未来を描いていました。
また、そんな科学万能の未来世界への警鐘も鳴らしていました。

＜都市生活＞

- ・稼働キャビン(家ごと丸々引っ越し可能)
- ・ヘリックスビル(全戸日当たり良好ビル)
- ・TVショッピング(配達シュートでお届け)
- ・立体カラーテレビ(62チャンネル以上)
- ・アンドロイド(ハウスキーパー)
- ・エアカー(車輪の無い自動車)



＜イメージカット＞

＜旅行＞

- ・HSST(超々音速旅客機)
- ・体内時間調整薬(時差ぼけ防止)

＜海洋開発＞

- ・海底都市(海洋開発の最前線基地)
- ・話すイルカ(海洋開発のアシスタント)



＜イメージカット＞

＜宇宙開発＞

- ・月基地(宇宙開発の前進基地)

自動運転のエアカー

「空中都市008」は月刊PTAという雑誌に「アオゾラ市のものがたり」のタイトルで子供向けの話として連載されていたので、未来技術をととても丁寧につたえています。以下は、「空中都市008」本文からのエアカーに関する描写です。

ジニーちゃんは、ちょっとかたをすくめてしたを出すと、エアカーの運転台にある誘導ボタンをおしました。

このごろの乗り物には、みんな自動操縦装置がついています。そして、数字とアルファベット(ABC[エービーシー]のこと)のついたボタンをいきたい場所の番号にあわせておし、スイッチをいれてやれば、あとは乗り物の中に組みこまれた電子脳が、交通管制局から出ている電波をうけて、自動的にいちばんすいている道路をえらんで、乗り物を運転していきます。

乗り物のまえには、レーダーがついていて、人や、ほかの乗り物にぶつからないようになっています。——つまりこのごろの乗り物は、よほどのことがないかぎり、人が自分で運転しなくてもいいようになっています。あぶない運転は、みんな機械がやってくれるのです。だから、子どもたちだけでのっても、ちっともあぶないことはありません。